

編纂委員

尾崎秀樹

武蔵野次郎

村上元三

山岡莊八

和田芳恵

日本文芸家協会編

代表作時代小説

昭和四十九年度

昭和四十九年度

代表作時代小説

一七〇〇円

無検印
承認

0093-749905-5170

昭和四十九年五月二十五日印刷
昭和四十九年五月三十日発行

編纂者 日本文藝家協会

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区西大久保三三

出張所 東京都新宿区松方町一番地

振替・東京二七五七

電話・(三六)二五五〇

まえがき

山岡 莊八

この選集もよく続いたものだと思う。昭和三十年度以来、この昭和四十九年度版の刊行で、恰度二十冊目になった。

この二十年間に、世界の動向は思想的な推移をふくめて目まぐるしく展開した。昭和三十年にはまだ日本は前大戦の傷あとが深く、経済面ではようやく戦後の荒廃から立ち直りを見せだした頃であった。それが今では世界陸目の経済大国に生長し、生長したと思ったところで、アラブ圏から原油の輸出に待ったをかけられ、再び第二次大戦勃発當時を想わすような石油不足にのめり込もうとしている。

実際に戦争はしていないのだから、不足の程度は比較にならない筈なのに、もうドラム罐を山林や耕地に運び込むというエゴイズムの出現が、私たちを面喰わせている。

このすばしこいエゴイズムが、仮りに全国の農協にあったとしたら何うなるか？ 各農協が、ドラム罐など隠匿する代りに、適当な場所を選んで、せめて自分たちで使う二三年分の貯油場でも作ってあったとしたら何うであらうか？

こんな資金は旅の恥は掻き捨ての、武勲赫々たる農協の世界見物費の中に求めれば、ほんの僅かな関心だけで、素晴らしいものが建っていったに違いない。

いや、それが建った話でもよし、建てなくて消えた話でもよい。仮りに作家が、そうしたところに取材の眼をこらした小説をモノしていたら、何処かで必ず建っていたに違いない。それが実は、読者大衆と小説の接点なのである。ところが、この両者の間には、ご存知の編集者なるものが介在し、その好みによって、適宜、自在にエロづけられる。その結果は、あわててドラム罐を隠置しなければ安心出来ないという行為にもなれば、他人の困難を自分だけは金儲けのタネにしようとか北叟笑む素晴らしく間の抜けた賢さにも変化する。私は総じて作家が、大衆文芸と純文芸の区別はないなどと云っているのを聞くと慄然とせざるを得ない。作家としてその才能次第で、書きわけることなど思いも寄らないという人はあろう。しかし編集者の好みとか、才能というものが介在して発表される限り、書きわけ得る人が書きわけて悪いわけではない。

純文小説の場合には視野を変えよの、テーマが氣に入らぬと云つてみても話になるまい。しかし、始めから大衆を意識において書きあげる小説には、それなりの良心と責任感と才能がなければならぬ。

セックスは石油の代りにならないのである。いや、給料だけはどん／＼上げて、インフレは真平というような経済理論は、まだ地上に芽生えていないこと位は知っていなければならぬのである。

とにかく現在の大衆文芸は玉石混淆、手のつけられない混乱を示している。その間で、曲りなりにも主張を持つて二十年、二十冊目を刊行して来た「代表作時代小説」の編集者、発行者の労を多としなければならぬ。そして、ここに集録された作品に欠けているものは何であつたらうかと、改めて反省してみるのも作家の責任であらうと思う。

目 次

座頭の襦袢	戸板康二	七
劍魔稻妻刀	柴田鍊三郎	七
平治元年	永井路子	四
谷地の花	船山馨	五
薬草の栽培法	星新一	五
東海道抜きつ抜かれつ	村上元三	六
ヤマトフの逃亡	山田風太郎	一〇
髪	風巻絃一	一四
浅草榎寺屯所	永岡慶之助	一五
上意討ち心得	滝口康彦	一六
女菩薩の穴	駒田信二	一六
志士と写真	山岡莊八	一七
儒教將軍	陣出達朗	一九

品川宿おしん	岩井護	三七
戦国とりかえばや物語	南條範夫	二七
花	伊藤桂一	二五
はたるの庭	杉本苑子	二五
讐	網淵謙錠	三七
間男料	小島政二郎	三三
腑分け絵師甚平秘聞	渡辺淳一	三二
しぐれ河岸	早乙女貢	三九
遺書欲しや	笹沢佐保	三二
箱根細工	池波正太郎	四二
九内剣	戸部新十郎	四三

まえがき 山岡 莊八
あとがき 武蔵野次郎

装
幀
太
賀
正

作者のことば

「振袖と刃物」という短編で、歌舞伎の毒婦物という演目のジャンルが、偶然のキッカケから行われるようになったという、架空の物語をこしらえた。

じつは昔書いた「団十郎切腹事件」もそうなのだが、これは多くの演劇史に対する勝手気儘な推理である。

「座頭の襦袢」も、同じ着想の小説である。いま行われている「車引」という芝居の演出では、三つ子の兄弟なのに、梅王丸と桜丸が赤い襦袢、松王丸だけが白い襦袢を着ている。徳川時代、ある時期までは、三人とも、揃いの赤であった。なぜ、座頭の演じることになったいる松王丸が、ひとり白を用いるようになったか。それを推理して、この作品を考えた。

にせ演劇史というわけで、いささか悪戯の嫌いがあるが、この筋を工夫するのは、ぼくには大変楽しい作業なのである。

大正四年十二月十四日東京都生れ

品川区荏原七―一七―一九 丁142

日本文芸家協会々員

「団十郎切腹事件」にて第四十二回直木賞受賞

主著―「歌舞伎への招待」

座頭がしらの襦袢

戸板康二

「車引」の場合は、三つ子の兄弟だから、三人とも揃いの衣装で出るようになっていた。紫の童子格子の厚綿の下に、梅王丸、松王丸、桜丸が、それぞれ梅、松、桜の縫いとりをした赤地のじゅばんというのが、昔からこの場の扮装ときまっていたのだ。

しかし、五代目団十郎がある時、白地の衣装を着て出た。杉王丸を自分の分身として予め登場させておくこととともに、座がしらの演じる役を、ほかの二人よりも、際立って見せようとする思いつきである。

昭和十二年の歌舞伎座で、先代幸四郎の梅王丸、十五代目羽左衛門の桜丸に、六代目菊五郎が松王丸をした時と、昭和三十三年の新宿第一劇場で「車引殺人事件」の劇中劇に一幕挿入した時と、この二回に限って、古風な赤揃いで演じたが、他の場合、つねに松王丸は白である。団十郎がなぜ、白のじゅばんを思いついたのかは明らかでない。

(歌舞伎百科)

—

江戸には由緒ある世襲の座元の名を看板に記した、三つの芝居小屋があつて、中村座、市村座、森田座それぞれに、毎年十一月の顔見世から翌年の九月まで、専属の役者が出演した。

この三つのやぐらのほかに、小さな芝居が、いわゆる

岡場所や社寺の境内にあつて、そこにも人気役者が出ている。

芝の神明や根津権現の宮地に小屋を掛けしているのは、タンカラと呼ばれて、三座の役者は同業とも思っていないが、木戸が安いのと、意外に達者な役者や、美しい女形がいるので、潜在する人気は、ばかにならない。

商店でいえば、店のあるじや番頭は堺町や木挽町にゆくが、女中や小僧は、小芝居を見るのを楽しみにしている。

小芝居の中では最も格の高い根津の小屋に、姉川与七という、立派な顔の座がしらがいた。

三座の大部屋にいて、目立った役もかなり演じたのだが、道楽がすぎて、師匠をしくじった。身が軽いので、石川五右衛門や蘭平の立ちまわりでは、捕り手のかしら分に出て、団十郎の相手をして褒美をもらったこともあり、その団十郎がしきりにとりなしてくれたのだが、師匠はとうとう破門してしまった。

名前をかえて小芝居に行くと、檜舞台をふんだ経歴が箔をつけて、さすがに舞台も大きい。たちまち中軸から座がしらにまで成り上った。

団十郎の前に出ていた時は、江戸一番の顔と見くらべられ、かすんでいたこの男の目鼻立ちが、小芝居だと、無類の器量になる。「忠臣蔵」の浄るりの文句ではない

が、昼間見えなかった星が、夜になると光るようなものである。

堺町にいた時は、その「忠臣蔵」といえば、せいぜい進物場のエヘンバツサリの折助ぐらいにしかねなかった役者が、由良之助や平右衛門を演じるのだから、幕も粗末などん帳しか許されない小屋とはいえ、本人の心持は、たいへん出世したような気がした。

こうなると、身状もおのずから改まる。ばくちもつつしむようになった。もともと腕は立つのだから、見物には喜ばれ、与七と声がかかる。人間が生まれ変わったようになっていた。

もともと、与七にとって、いろんな腐れ縁が残っていた。

大部屋にいたころから弟分にしていた布袋の文次という男は、はつきりいつて、今ではつきあわないほうがいいに決っている。与七としては、手が切れない。

文次には、じつに恩に着ていることがある。芝居が休みになると師匠をごまかして入りびたっていた賭場で、スッテンテンになった時、役者と知ってはずかしめようとしたやつらに、身体を張ってくれたのが、この文次なのだ。

まかりまちがえば、腕の一本も折られかねない窮地を救ってもらったのを、生涯与七は忘れるわけにはゆかない。

い。文次を袖にでもしたら、お天道様に申しわけないと思っている。

十何年の仲だといふこのあいだも述懐し合った外神田の芸者の小染もいる。世帯を持とうとたびたび相談したが、まとまらないまま、歳月を経た。

小染には、因縁なおふろがいて、そのおふろの言葉を借りると、べいべい役者に可愛い娘はやれないというのだった。

売れっ子でもあるから、働けるだけ娘に働かせようという気らしい。与七は実子といっているが、あれは貰いっ子にちがいないと思っている。薦が鷹を生むということわざがあるが、どう見ても、あの親から小染のような気立のいい娘が生まれる道理はない。

与七がすっかり了簡を入れかえたのを知って、前の師匠も、きげんを直したようだ。

池の端で飲んでゐるから、やって来いという使いをもらった時は、ほんとに嬉しかった。

三崎町の家に帰って、着物を着かえて、飛んでゆくと、ひさご屋の座敷には、師匠と師匠の弟の女形とが、ひいきの札差に呼ばれていて、与七を、ほどのいいところに招いた。

「申しわけありません、御無沙汰ばかりしておりました」と、畳に頭をすりつけた。

「与七というんだってね、今の名前は」と客がしずかに訊いた。

「はい、おはずかしゅう御座います」

「はずかしいことがあるものか。今こちらに聞けば、もう座がしらだというじゃないか。たとえ小屋は小さくても、まア結構なことだ。師匠から離れて、それっきり、世の中からも見すてられる芸人がいくらもある。立ち直ったというのはえらい」と、杯をくれて、この席を設けた旦那は、いかにも気持よさそうに笑った。

師匠もここにこしている。

「あのおかみさんも、お嬢さまもお元気でいらっしゃいますか。しきいが高くてついおたずねもしませんが」

「おかげで、二人とも風邪もひかない。それはそうと、お雪がお前に会いたがつてゐるぜ」と師匠が、さりげなく言った。

与七は、鼻がつうんと抜けたような気がした。お雪は生まれた時から知っている、師匠のひとつぶ種である。

おしめもとにかえ、すこし成長してからは、抱いたりおぶったりした。弟子の中で、どういうわけか、お雪は与七、前名でいうと幸助が大の気に入りで、どんなに駄駄をこねていた時でも、この弟子が目の前に行つて、ひょっとこの顔をして見せると、泣きやんで、はしゃぐのだった。

「お雪は幸助のお嫁さんになるんだ」といつていた時期もある。それはまだ幼い娘が、何も知らずに、どう逆立ちしたって出来そうもないことを、頑是なくいつたのにすぎないが、与七はそういう言葉を、今でも時々思い出していた。

お雪が十六になった時、ある日、師匠の家の台所で、弟子仲間と膳をならべて御馳走になっていた当時の幸助の前にあらわれて「お雪は、幸助のお嫁さんになるのは、あきらめたよ」といった。

「へえ、なぜです」と、隣にいた幸治が訊ねた。

「小染さんという人がいるんだもの。私がいくらお嫁さんになりたいといつても、貰ってくれるわけがない」と、ませた口を利いたのも、ついきのうのこのようである。

こうして、久しぶりに、藏前の旦那衆の席で、師匠に会えただけでも、天にものぼるようなのに、お雪が会いたがつているといわれて、与七は胸が一杯になった。

「ほんとのことをいおうか」と師匠がすわり直した。

「へえ」おそるおそる、顔を見る。

「わたしは、お前が、こんなに立ち直るとは思っていなかった。ばくちを打つのが、飯より好きで、給金を右から左に、まるでどぶへでも捨てるようなことをしている幸助は、とても弟子にはしておけないと思ひ、名前をとり上げたのだが、それからあのお前が、三座とはそり

やアまるで格式がちがうにしても、とにかくにも、一
国一城のあるじになったのだから、おどろいたよ」

「へえ」与七は肩をすくめた。

「私もそう思ってるんだよ」と師匠の弟が口を添えた。

「よかったら堺町に帰参してもらったらと、私は兄さん
にもすすめただけど」

「そいつをいっちゃ、いけねえ」と師匠が弟を制した。

「おれが手しおにかけた男が、江戸のどこかで、おれの
教えた芝居をしていると思うだけで、悪い気持はしない。
幸助、じゃねえ今は与七だな。この秋は、すしやの権太
をしたそうだが、万事おれの通りにやったんだろうな」

「大それたこととは思いましたが、師匠がなさったのを見
おぼえておりますので、その通りにさせていただきます
した。ただ、あんまり同じでもと思って、格子縞の浴衣
だけは、着ずに出ました」

「あの浴衣は、高麗屋と音羽屋おとろやとは、縞の寸法がちが
うんだ。面倒な衣装をわざと逃げたのは、いい心掛だ」

まるで、蝶よ花よとそやされるような思いの上首尾で、
与七は夢でも見ている気持になった。

「お雪が、お前の芝居をひと目でも見たいと、前からい
っているんだが、芸の世界はきびしい。破門された弟子
の舞台を、師匠の娘が、かげのぞきしてもまずいという
掟おきてがある。しかし、きょう、こうして、旦那の前で、お

前ともあらためて杯のやりとりをした。破門という言葉
は水に流そう」

「ありがとうございます」と泣いた。

「よかったなア、幸助。おっと、与七だったな」と札差
の旦那が高笑いをした。

どうやら、この席は、与七のために、わざわざ設けら
れたものようだった。

そして、そういう段どりになったことについては、師
匠の弟と、師匠の娘が、人知れぬ力ぞえをしてくれたに
ちがいないと思うのだ。小染にもさっそく話して、喜ん
でもらおうと思った。

「あらためてまたお宅まで、まかり出ます。何と御礼を
申しあげていいか、御恩の返しですが、ごさいません」
「なアに、同じ芝居の道で世すぎをしているんだ。何か、
そっちから、教えてもらうことも、そのうち、できて来
るだろうよ」

戸外に出ると、もうすっかり寒夜であったが、谷中の
家まで帰る八町の道は、雲をふんでいるようで、与七の
心に、うっとり春が来ていた。

二

破門を許され、師匠から優しい声をかけてもらったの
だから、すぐにも挨拶に、行かなければならない。

与七は、まげものに入れた佃煮と、お雪の好きな谷中名物の薄焼きのせんべいを手みやげに、しばらく足を入れることもできなかった家をたずねた。

すっかり娘らしくなっていたお雪がいそいそと出迎えてくれた。その振袖の姿は、ついこのあいだの「すしや」でお里をつとめた、一座の七之丞よりもあでやかだった。

おとなっぽくなっただけに、お雪には、色気が全身にみなぎっており、それが言葉のはしにもあらわれる。

「小染さんとは、あいかわらず、逢っているんでしょ」と、すぐお雪が、前にはなかった、おきょうな口調で訊いた。

「およしよ」と母親がたしなめた。「久しぶりであった人に、そんなことをいきなりいうなんて、はしたない。

幸助、ごめんよ」

「どうも、汗をかいてしまいます」と与七は、言葉の通り、脇の下に出て来た汗を、そっと手ぬぐいで拭いた。

「だって、おっ母さん、お雪は気になるのだよ、小染さんのことが」

「およしよといったら、およしよ」ともう一度かん高い声でさえぎったあと、おかみさんが与七を正面から見て、

「いえね、お雪は、その人のことを、嫉んでいるんだよ」といった。

「そうじゃないのよ。いやな、おっ母さん」と袂で打つしぐさをしたあとで、娘が低い声でいった。「心配なのよ、あの人のことが。いろんな噂がつい耳にはいるものだから」

与七は、よっぽど聞き返したかったが、必死になってこらえた。

小染の噂なら、聞こえよがしに、与七の耳に、しじゅうはいって来る。おふくろがおふくろだから、いやな客のとり持ちもしなければならず、そういうことは委細耳に入れる約束にはなっていない、小染としては、何か隠していることがあるらしい時もある。

それが、とんでもない方角から聞こえて、与七が小染を問い詰めたり、甚しい時は、折檻したこともある。

見ぬもの清し、知らぬが仏で、小染について壁訴訟をする者がいても、はぐらかして来たが、いま三年ぶりで会ったお雪から、こんなことをいわれると、これはあだに、聞き流すわけにはゆかない。

信じているつもりでも、不安が暗い雲のように、与七の上に、おおいかぶさった。

谷中に帰ると、さっそく家に住みこんでいる若い者を使いにやった。

こういう時の文には、さりげなく書くのが上策である。「しゃもでも食べないか」と走り書きにして、届けさせ

た。いつも落ち合うのは、神田明神（まことじん）の境内である。それは、ことわらなくてもわかつている。

明神には水茶屋が三軒あって、お松という女が出ている店が、いつも二人が出会う場所になっている。

お松という女は三年前に死んだ路考（ろこう）の若いころのおもかげを思わせる美人である。小染とはうまが合うらしく、自然、与七にもよくしてくれる。

もっとも、お松を小染は、このごろ、あまりみとめていない。

「器量よしだが、あのひとは、その器量が毒なんだよ」というのである。

小染には何もかも見通しらしいのだが、美貌に目をつけて、茶屋にかよって来る男たちを、じつに見事にさばっている。俗にいう、手玉にとっているのである。

一昨年のくれには、お松のために、得意先の勘定をつかいこんだ揚句、わざわざ明神の鳥居の前の松の木で首を吊ったお店者がいた。

そんな時でも、お松は、すずしい顔をしていたばかりか、線香をあげにもゆかなかったという。

去年はさる旗本の次男が、お松の色香に迷って、座敷牢に入れられたという、まことしやかな風説もあったし、日本橋から毎日来る隠居にねだって、芸者も着ることのないような着物を五枚も作ったと、小染が話していた。

実情はともかく、すくなくとも、女たちのあいだの評判は、まるで悪い。同じ境内に店を出している同業の女たちにいわせると、お松は稀代の毒婦（どくぶ）ということになる。小染が、そんなふうにいながら、自分と会う場所を変えないのがおかしいと、今ふと与七は思った。

もしかすると、小染の弱味を、お松がつかんでいるのではないか。自分に隠している何かをお松が知っていて、陰に陽に、それをつきつけて、小染をいたぶっているのではあるまいか。

師匠の娘のお雪から、いやなことをいわれ、ひたすらそれが胸につかえている与七としては、そんなふうにかんぐられ、つい胸の修羅（しよら）が燃えて来る。

いつも与七がゆくと、近くにいる小染のほうが先に来ていて、お松は愛想よく迎え、型通り盆を出して、すぐ引きさがってしまう。

世間話もしたことがない。第一、与七はお松と二人きりになった記憶もないのだ。

小染について、お松が何か知っているとすれば、それを誘導してしゃべらせる位の自信は、与七にある。

小染が来る前に、お松の茶屋に行つて、訊いてみよう。そう思い立つと、矢も楯もたまらず、使いが出て行くと、そのあとをつけでもするように、与七は家を出た。

近道を知っているので、小染のところに、文が届いた

のと同じ位の時刻に、与七は、明神の鳥居をくぐった。

首くくりがあつたといわれる松が、その時と同じ枝をのばしているのを、いつもにないことだが、与七はふり返った。

まず拝殿の前まで行つて、柏手^{かしぢ}を打ち、すぐお松のいる店の前に立つた。

縁台に赤い毛氈^{もじ}をかけたのが三つ、その中の一つには、日傘^{ひがさ}がさしかけてある。

水屋^{みづや}が設けられていて、そこには、釜^{かま}がかかっている。水屋の屋根のひさしのかげには、「御茶召しませ」と染めたのぼりが立ててある。

そろそろ日の沈む時刻が迫っているのに、店先の縁台に出されている茶碗^{ちawan}をのせた盆^{ぼん}が、そのままになってゐる。つまり客が帰つたあとが片づけられていないのである。

「お松さん」と呼んだが、返事がない。

水屋の奥に小座敷^{こざしき}が二つあり、一番奥には寝泊りのできるような部屋と手水場^{てすいば}があつたはずだ。

与七は、水屋の脇を通りぬけ、座敷の前の土間に立つて、「お松さんはいないか」と呼んだ。あいかわらず、何の応対もない。

いちど外に出て、境内を見まわすと、参道をへだてた向うの茶屋の脇に、身体を斜めにして立っているのが、

どうやら布袋^{ふくぶくろ}の文次らしかった。

「文次じゃないかと」呼んでみたが、その男は急に茶店の裏のほうに、影を隠した。

「人ちがいかな」といった。世話だんまりの幕切れに、煙草入れを拾つた男がいうセリフのようで、与七は、おかしくなつて、独りで笑つた。

向うの茶店から、顔は見知っている、たしかお花という女が出て来て、「親方、お松さん、いませんか」といった。これは、与七に対する親切というものである。

いつもよその店に來ている客ではあるが、自分たちがしじゅう見にゆく小屋の役者に対する挨拶^{あいさつ}なのだろう。

「こりゃアどうも」と与七は、愛嬌^{あいせう}を八重歯^{やえば}で見せて、頭をさげた。これは、逆に、お客に対する役者の挨拶である。

「いま、そのへんに、お人の姿が見えたようですが、お店にいらした方でしょうか」

「さア」と見まわして、「存じません」と答える。

「ありがとうございました」ともう一度会釈^{えしやく}して、与七は、お松の店にはいつて行つた。こんどは、土間をずつと奥まで行つて、二つの座敷の次の小部屋の前で、声をかけた。その時、与七の目に、何やら血のようなものが、落ちてゐるのが見えた。

半分あいてゐる障子の中から、はばのせまい廻り縁を